

アメリカ農業に対して、広大な耕地で大型機械を利用して低コスト生産に取り組む企業型大規模農業というイメージが定着しているが、近年は CSA（地域支援型農業）が各地で広がり、都市部ではファーマーズマーケットも普及していることは、日本でも盛んに紹介されている。在外研究のため 2006/07 年にアイオワ州立大学農学部農業教育学科に滞在していた著者はアメリカ農業の「二重構造」に着目し、拡大志向の強い少数の大規模農場が生産の大半を担い、それを取り巻くように小規模農場が幅広い裾野を形成している様子を、農業センサスや農業資源管理調査等の農業統計を駆使しながら様々な角度から描き出している。

著者は次のような問題意識からアメリカ農業の実像に迫る。第 1 に、現状という横糸（第 I 部）と歴史という縦糸（第 II 部）を組み合わせ、複合的な視点からアメリカ農業の姿を浮かび上がらせる。第 2 に、地域の固有性に注目するあまりアメリカ農業という共通基盤から離れるのを避けるため、地域分析は行わず、あくまでも各地域に共通するアメリカ農業の構造問題を取り上げる。・・・つまり、現状理解のためにも歴史の縦糸が不可欠なのだが、「コロンブスのアメリカ大陸発見から 1970 年まで」を対象に、第 9 章「アメリカ建国と公有地政策」、第 10 章「アメリカ農業を形成したホームステッド法」、第 11 章「アメリカ産業革命の諸相」、そして第 12 章「アメリカ農業革命の影響力」で構成される第 II 部「アメリカ農業の過去に学ぶ」については目次の紹介にとどめ、以下では第 I 部の内容紹介と評者のコメントのみ述べさせていただく。

第 I 部「アメリカ農業の現在をみる」は 8 章で構成され、農場・経営者・労働力といった農業資源の賦存状況を階層構造的に分析した第 1 章、販売額・所得等のフロー指標や財務諸表を整理しながら農場経営の性格をやはり階層構造的に分析した第 2 章を通じて、前述した「農業構造の二重性」が析出される。さらに第 3 章では少数の大規模農場への「集中度」が計測され、「二重構造」「階層分化」の様子が説得的に描写される。そこで明らかになった「二重構造」ゆえ、著者は平均値でアメリカ農業を捉えることには自ずと限界があると述べる。それだけではない。こうした分析を通じて、ア

メリカ農業統計に見られるデザイン上の欠陥ゆえ「統計をうまく利用すればアメリカ農業の実態が立体的に浮かび上がってくるが、間違えと現実とは似ても似つかぬ絵を描いてしまう」ことに注意を喚起する。農業統計は「本物らしい農場の姿」を薄めてしまう問題点を抱えているのである。では、広範な裾野をもつ円錐形構造の先端に位置する大規模農場こそが「アメリカ農業を動かす主体」と言えるのか。著者は、大規模層ほど顕著な契約農業の進展状況を確認しながら、契約農業を有利に進め、契約生産者に大規模化を促し、特定作物に専門化せざるを得ないような農業構造を導いてきた契約者こそが、アメリカ農業を動かしてきた主体であると喝破する。

続く第 4 章では農業補助金受給の既得権益化によって「農業者の自立精神」が蝕まれてきたことが指摘され、遺伝子組換え作物を扱った第 5 章でも、「農業者の GE 作物の採用理由と実際の効果の間にねじれ現象が生じている」にもかかわらず GE 作物が普及した背景に、寡占的な種子会社との間の非対称な関係だけでなく、「自分の意見を持ち自分で行動できる農業者」が消え去ってしまった問題があるとする。第 6 章では一転してオーガニック農業やファーマーズマーケットの到達点が考察されるが、「いまだ大海のなかの一滴にすぎず、量的な影響力はない」だけでなく、そこでも「二重構造」が顕在化してきている様子が確認される。第 7 章では消費局面に光を当て、食品価格の低下や高カロリー食を広げた食習慣の変化＝外食依存といった長期動向を確認しながら、それが「農業者と消費者の間のコミュニケーションの断絶」をももたらしてきたことが指摘される。

最後に第 8 章で、シュンペーターのイノベーション概念が援用され、農業者は「動かす者」としては現れず、むしろ「動かされる者」「単なる業主」の立場に甘んじていることが示される。ミクロレベルでは、オーガニック農業や環境保全型農業の活動をはじめ、農業者、農業団体、消費者、コミュニティ生活者が農業の展開をリードし、独占打破につながる新しい組織活動に取り組んでいること、そこでは「多方面にわたって多くのイノベーションが連鎖的に発生している」が、現状ではわずかなインパクトしかない「小さなさざ波」

がやがて「大きな津波」に発展する可能性が実現するかは未知数であるとする。

すでに指摘したように、本書は農業統計を駆使したアメリカ農業の多面的な構造分析を特徴としており、統計の利用と分析について詳細かつ批判的な視点を提供するなど、まさに「アメリカ農業を読む」ためのテキストとして、専門外の研究者・学生でも活用できそうである。その反面、アメリカ農業論や個別問題領域に関する国内外の学術的な研究成果が十分に渉猟されておらず、筆者の議論と既存研究とのリンケージが不明であるため、その独自性や学術的貢献を評価しづらくなっている。これがコメントの第1である。

第2に、著者が指摘するように、「地域分析は行わない」という接近方法はアメリカ農業を全体として特徴付けている階層構造問題を抉り出すために不可欠であったとはいえ、アメリカ農業の地域性は大きく、地域差が階層構造を孕んでいるだけでなく、地域的な動態と階層構造的な動態とが重なり合う部分もあるのだから、「アメリカ農業を読む」ためにも多少の地域分析は必要だったのではないだろうか。

第3に、GE作物が広範かつ急速に普及した背景が丁寧に説明されており、「ねじれ現象」という著者の指摘には同意する。だが、そこで参照されているデータが古く、豊富に蓄積されてきた国内外の研究成果がほとんど言及されていない。農務省経済調査局員のサーベイ研究が参照されているが、農薬削減効果が失効し始める前の1995～2002年のデータが対象で、しかも実験圃場のデータが多数含まれる代物であり、一部のGE品種を除き、増収効果と農薬削減効果については全体的に肯定的印象を与えかねない。そこから「ねじれ現象」を読み取った著者の良識は、滞在先であるアイオワ州立大学の研究者による2001年の論文によって与えられたようである。評者も自身の研究で肯定的に参照したことがある論文だが、現時点ではやはりデータの古さは否めない。実証データが蓄積されてきた今日でもなお侃々諤々の議論が続けられており、イデオロギー的な様相さえ呈しているだけに、GE作物の評価には慎重でなければならない。無難な結論が導かれるとしても、である。

第4に、本書は基本的には農民層分解論の伝統を継承し、アメリカ農業における「資本による農業・農村把握」の実態を統計的に裏付けるものだが、同時に農業者による対抗的イノベーションの可能性を救い出そうとする意図も感じる。著者が依拠するシュンペータ

ー的なイノベーション概念は本来、既存の需給構造や生産体系に囚われることなく利潤獲得機会を自ら積極的に・能動的に創造する資本主義企業の革新性と、それに支えられた資本主義経済の動態性・発展性を説明するものである。また、革新的企業家に由来する数々のイノベーションが既存の独占的企業によって最終的に掌握され、彼らの独占的地歩を固めることに結果してきたのは、農業関連産業にも顕著である。たしかに農業者の創意工夫もイノベーション概念でうまく説明されているが、仮に「2つのイノベーション体系のせめぎ合い」と捉えることが可能だとしても、両者の次元が大きく異なることが看過されてはならない。「小さなさざ波」の「大きな津波」への転化は自動的に生まれないのであって、大枠を規定するヘゲモニックなシステムの転換をどう展望するのが問われなければならない。実際、有機農業やファーマーズマーケットにも「二重構造」が現れており、回復したかに見えた農業者と消費者の関係性が、標準化された規格認証・表示制度によって媒介されるコンベンショナル化の動き、それを契機とした農外資本の参入も進んでいる。もし、その結果としてヘゲモニックなシステム自体が徐々に修正されるとすれば、そのことも含めて農業者の「企業者的な創造の役割」と捉えたらよいのだろうか。

実は、資本主義下で存続する小農経営の理解をめぐる、欧米農業社会学では様々な議論が繰り広げられてきた。農業生産過程への資本の浸透は、農場経営の直接的な支配権を掌握しなくても、例えば外部投入財や信用貸付への依存、川上や川下の農業関連企業による垂直的調整や契約農業の進展など多様な形態をとることは、アグリビジネス研究によって縷々明らかにされてきた。だが、それでも存続する小農経営の将来展望をめぐるのは、あくまでも「資本による包摂」が拡大深化すると捉える構造主義的法則論的な立場と、小農経営の主体性・能動性に着目し、むしろ「資本による包摂」に柔軟に適応して自らの領域を戦術的に確保しながら多様な事業展開を遂げる行為主体と捉える機能主義的で状況依存論的な立場との乖離が見られる。著者の意見を伺ってみたいところである。

ここまでの「深読み」を著者は期待していなかったであろうが、複合的な視点から豊富な統計データを批判的に読み取ろうとする本書の試みが、それだけの知的好奇心を煽ったと言えなくもない。農業構造問題に関心のある研究者や学生はもちろん、現代資本主義下の農業の行く末に関心のある一般の読者にも是非一読をお薦めしたい。